

0-9 カプセル抗がん剤溶解方法についての薬剤指導文書の有用性

～カプセルが飲めない小児がん患者のために～

○永井浩章、蟬川由美、小林知世、中山淳司、靱井佳奈、愛甲佳未、坂本有里恵、三輪祐太朗、北村晃子、藤永仁美、赤松規子、上田里恵、福井由美子、加古学
(こども病院 薬剤部)

【背景】

小児にとってカプセルの内服は困難であることが多く、その場合には調剤時に脱カプセルを行う必要がある。しかしながら抗がん剤の場合は脱カプセルを行うことで抗がん剤が飛散し、医療者や患者家族が曝露され、健康被害が生じる危険性がある。当院ではカプセル抗がん剤の場合は脱カプセルを行わず、用時溶解にて服用し、曝露のリスクを減らしている。

今回カプセル抗がん剤を内服できない患者及びその家族向けの薬剤指導文書を当院で独自に作成したので、その内容と成果について報告する。

【方法】

薬剤指導文書は、当院採用薬のカプセル抗がん剤であるテモダールカプセル、ベプシドカプセル、ベサノイドカプセルについて作成した。各薬剤の溶解方法については、添付文書、インタビューフォーム、論文報告等を参考にした。また自宅での服用を考慮し、個人防護、薬剤付着時の対応方法についても記載した。薬剤指導文書を用いた説明は、医師によりカプセルの内服が困難と判断された患者に対して行った。

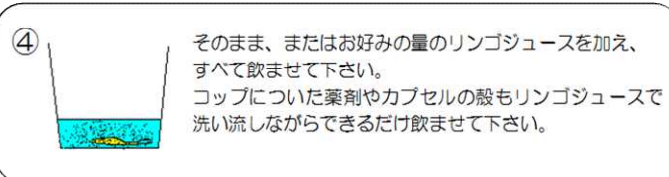
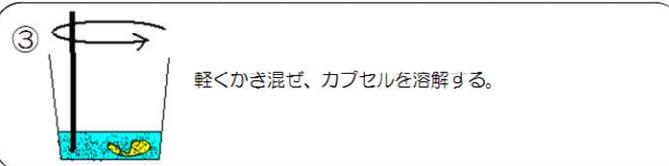
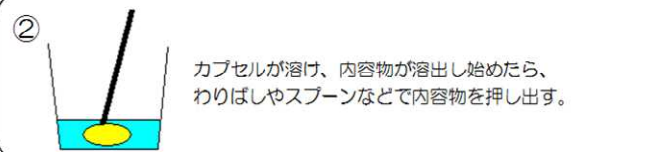
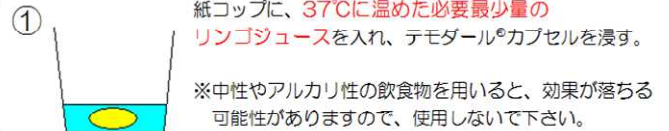
【結果】

各薬剤の溶解条件は溶解後の安定性を考慮し、テモダールカプセルは「37℃に温めた必要最小量のリンゴジュース」、ベプシドカプセルは「50℃に温めた単シロップ2mLと水18mL」、ベサノイドカプセルは「37℃に温めた少量の牛乳」とした。溶解は紙コップに各薬剤と各溶解液を入れ、カプセル溶解後残ったカプセルの殻も服用することとした。なおベサノイドカプセルは光に不安定であるため、溶解中も遮光することとした。

また、服薬時の抗がん剤曝露予防として、「溶解時は、マスクや手袋を使用し、全工程において薬剤が皮膚につかないよう注意すること」、「皮膚についた場合は、速やかに洗い流すこと」、「飲み終えた紙コップや残ったカプセルの殻などは、他人が触れない形で処分すること」を薬剤指導文書に記載した。

作成した指導文書(例1参照)を用いて指導を行った結果、指導内容が統一化され、異なる薬剤師が指導を行った場合においても説明内容に違いや漏れがなかった。また、指導後用時溶解にて服薬が開始でき、退院後自宅で服用する際も安全に治療を継続できた。

テモダール®カプセルを溶解して服薬する方法



溶解時は、マスクや手袋を使用し、全工程において薬剤が皮膚につかないように注意してください。

皮膚についた場合は、速やかに洗い流して下さい。

飲み終えた紙コップや残ったカプセルの殻などは、他人が触れない形で処分して下さい。

兵庫県立こども病院 薬剤部

例1 テモダールカプセルの薬剤指導文書

【考察】

薬剤指導文書を作成し、その内容を共有することで患児、家族、医師、看護師、薬剤師が共通の認識を持つことができ、薬剤曝露防止に非常に有効であった。また薬剤管理指導を行う限られた時間の中では服薬に関わる家族全員に説明することは難しいが、溶解手順を明解に図示した薬剤指導文書を渡すことで、退院後も説明を受けなかった家族でも安全に服用させることができた。小児医療において服薬は問題となることが多いが、今後も患者指導文書を充実させることで、安心、安全な医療に貢献していきたい。